ラジオ放送

＜令和2年4月～6月放送分＞

ON AIR

金光教の声

No.431

もくじ ～*contents*

＜先生のおはなし＞

☞金光教の先生のお話です。

●温かい手（「信心ライブ」） *page 1*

●ぼくのいのち *page 5*
愛媛県・今治教会　塚本一眞

●あなたになら話せる（「信心ライブ」） *page 9*

●ひとことのあいさつから *page 14*
（「もう一度聴きたいあの話」）
島根県・今市教会　森山恵美子

●大地にひれ伏して *page 18*
福岡県・黒木教会　鳥取和道

●おめでとう！ *page 23*
大阪府・鳳教会　工藤由岐子

●華麗なるダイビングキャッチ（「信心ライブ」） *page 27*

●神様は親 *page 31*
東京都・麻布教会　松本信吉

●足もと（「信心ライブ」） *page 35*

＜金光教案内＞

☞ 作家・かんべむさしさんによる金光教の紹介

●かんべむさしの金光教案内Ⅱ　第１回 *page 39*

●かんべむさしの金光教案内Ⅱ　第２回 *page 43*

●かんべむさしの金光教案内Ⅱ　第３回 *page 47*

●かんべむさしの金光教案内Ⅱ　第４回 *page 51*

《信心ライブ》

「温かい手」

おはようございます。

今日は、岐阜県・金光教南大垣教会（みなみおおがき）の今西（いまにし）信子（のぶこ）さんが、平成28年9月、墨染（すみぞめ）教会でお話しされたものをお聞きいただきます。

小学校4年生の頃だったと思いますが、おじいちゃんが、「信子、喫茶店へ行くか」と言うんですね。喫茶店なんて行ったことなかったので、それはそれはうれしくて、もちろん行きました。すてきな喫茶店におじいちゃんが連れて行ってくれて、ウェートレスさんにクリームソーダを頼んでくれたんですね。

ウェートレスさんが運んできてくれたクリームソーダは、グラスのすれすれまで奇麗なグリーンのソーダが入っていて、その上には大きなバニラアイスが乗っているんです。それで、柄の長いスプーンとストローが付いてくるのですけど、何せ生まれて初めてのクリームソーダなので、どこから飲めばいいのか、どうやって食べればいいのか分からないんです。私が戸惑っていると、おじいちゃんがスプーンを取ってアイスをソーダの中にグググッと入れたんです。その途端ソーダがブワッとあふれて、テーブルがソーダだらけになったんです。

私もおじいちゃんもびっくり大慌てでした。そしたらおじいちゃんがテーブルに口を付けてズズッとソーダを吸うんです。吸いながらその

おしゃれな喫茶店のすてきなウェートレスさんに向かって、「ねえちゃん、ねえちゃん！　台拭き、台拭き！」と大きな声で叫んでですね、何人かウェートレスさんが来てくださって、私もちょっと恥ずかしい思いをしながらも何とかテーブルが落ち着いたようなことでした。

そんなハプニングだらけのおじいちゃんとのお出掛けでしたが、私にとっては本当に楽しい、いい思い出です。

おじいちゃんから教えてもらったことも、数え切れないほどありました。

私が中学生の時のことです。その日は学校の定期テストで午前中には家に帰っていました。「もうちょっと休憩してから勉強しよう」と自分に言い訳をして、テレビで「徹子の部屋」を見ることにしました。すると、その中で女優さんが、「仏教では輪廻（りんね）と言って、命あるものは皆死んだ後、また生まれ変わることができるでしょ。だから、私はゴキブリを退治する時、『人間になれ！　人間になれ！』と言いながらハエたたきでやっつけてるんです」という話をされました。

私は、金光教の教会に生まれて、親戚も皆金光教なので、他の宗教の教えとか考え方を全く知らなかったんです。私は、大急ぎでおじいちゃんが座っているお結界（けっかい）に行って、「おじいちゃん、輪廻って知ってる？　仏教やったらな、死んだ後、生まれ変わってまた生まれてこれるんやって！　金光教やったら、もう生まれてこれへんのやろ？　それやったら私、仏教がいい。

私、死んだらまた何かになって生まれてきたい！」と言いました。

すると、おじいちゃんは、ちょっと考えて、「どうやろなあ。おじいちゃんもまだ死んだことがないさかい、死んだ後のことは知らんのや。そや、おじいちゃんが死んだら、信子のところへ行って教えてやるわな」って言ったんです。

私が金光教の教師にならせていただいてからは、信心の分からないところを叱られながらも何度も何度もおじいちゃんに教えてもらい、私の中ではおじいちゃんが身近な「金光様（こんこうさま）」でした。ですから、おじいちゃんが亡くなった時のショックはとても大きく、師匠を失ってしまった喪失感で、お葬儀の後、おじいちゃんの柩（ひつぎ）が教会から出ていく時は、悲しみで立っていられないほどでした。今にも崩れそうな私を見かねてか、誰かが私の肩を後ろから支えてくださっていました。その手はとても温かくて、おじいちゃんを乗せた車が出発するまで、その温かい手は、私の心までも支えてくれていました。

おじいちゃんを乗せた車が出発した後、私は、その温かい手の主にお礼を言おうと後ろを振り返って、思わず息をのみました。すぐ後ろはブロック塀で、人が入れるような隙間は全くなかったのです。

その瞬間、私にはすぐ「あの手は、おじいちゃんだ！」と分かりました。そして、あの日の約束を思い出したのです。「信子、おじいちゃんは今までどおり、いつでもこうやっておまえのことを支えてやれるんやで」。おじいちゃん

は私に、そう伝えに来てくれたのです。

今の私は、「死んだらどうなるの？」と質問していた中学生の頃の私に、「人は亡くなってからも御霊神様（みたまのかみさま）となって、ずっと後の者を温かく見守り支え続けることができるんだよ」と、自信をもって伝えることができます。人が死んだ後、御霊神様として働き続けるには、後の者が亡くなった方のことを忘れることなく願い続けているからこそ、御霊神様として働き続けることができるのです。

また、その方のことを忘れないだけでなく、教えていただいたことが今の自分の生活の中でどう働き、どう現せているのかも大切なところだと思っています。

いかがでしたか？

信子さんのおじいさんの松岡道太郎（まつおかみちたろう）先生は、墨染教会の初代教会長で、生活の全てを神様にお任せし、長年にわたって多くの人を救い導いた先生です。信子さんもおじいさんが大好きで、子どもの頃からおじいさんのそばにいることが多かったそうです。

金光教では、「生きても死んでも神様のお世話になる」と言われています。亡くなった後、肉体は土にかえりますが、その思いはなお深く、御霊（みたま）となっても神様のお世話になりながら、大切な方へ思いを注いでいくのですね。

きっと、あなたもその目に見えぬ温かい手で支えられているのに違いありません。

《先生のおはなし》

「ぼくのいのち」

愛媛県・今治（いまばり）教会　塚本（つかもと）一眞（かずまさ）

皆さん、おはようございます。

今から朗読する作文は、息子が夏休みの宿題で交通安全について書いたものです。

「ぼくのいのち」　小学４年　塚本治夫（はるお）

ぼくのお父さんは、２歳のころ交通事故にあいました。道路の反対側にいたおばあちゃんに呼ばれて、横断歩道を渡らずに、道路を走って横断しました。すると左折してきた車にはねられたそうです。その時、足を骨折して、しばらくギプスの生活をしたと言っていました。

もし打ちどころが悪かったら、死んでいたかもしれません。そのままお父さんが死んでいたら、ぼくはこの世に生まれていません。無事でいてくれたから、ぼくのいのちが今ここにあります。

この話は、今回、交通安全の作文を書くことが決まって、初めて聞いた話だったので、とてもびっくりしました。

ぼくは今まで一度も交通事故にあったことはありません。でも、今年の夏休みに、小学校から帰る途中、よそ見をしながら自転車を運転していたおじさんにぶつかりそうになって、こわい思いをしました。

みんなが交通ルールをきちんと守ったら、事故がなくなります。相手を思いやるやさしい気

持ちを持って、交通事故のない平和な世界を作っていきたいです。

みなさんも「いのち」を大切にしていきましょう。

この内容は、なかなかやる気のスイッチが入らない息子の機嫌を取りながら、親子で一緒に考えたものです。交通安全がテーマだったこともあり、私が交通事故に遭った時のことを親子で話し合うことができました。

日常生活を送る中で、勉強や部活、友達のことなど、学校生活について話すことはあっても、事故のことや命について子どもとゆっくり話し合うことが少なかったと気付かされました。また、私自身、足にギプスをしている思い出があるくらいで、実際のところ、事故当時の記憶はほとんどありません。

今回、作文を書くに当たり、改めて両親から事故当時の様子を聞かせてもらいました。相手の車がゆっくり左折してきたのでスピードがそれほど出ていなかったこと、ギプスをはめた後、外出する際にはしばらく車を怖がっていたこと、親としての不注意を反省し、神様におわびしながら、毎日快復を祈っていたことなど、昨日のことのように話してくれました。親の祈りを感じると共に、両親から私へ、また私から息子へ命の流れを再確認することができました。

おかげさまで、事故の後、後遺症もなく、現在まで元気に過ごさせてもらっています。

もし、あの時、交通事故で死んでいたら、妻

とも結婚していなかったでしょうし、2人の子どもたちにも巡り合えていなかったと思います。その後も命に関わる危ないことも度々ありましたが、神様から大難を小難に、また小難を無難にしていただいて、今日まで生かされて生きています。

昨今、車に関する事故や事件の報道を見聞きする度に、当時は幼く何も分からなかったとはいえ、あの事故で誰かを加害者にしていたかもしれないと思うことがあります。

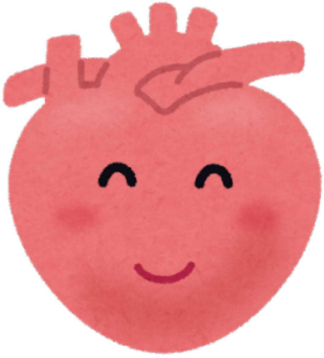
私も運転免許証を取得して20数年になります。若い頃は無茶な運転をしていたこともあり、今思い出しても冷や汗が出ます。ある時、信心の先輩から、車を運転する前には「心穏やかに安全運転をさせてください」と手を合わせ、運転後には「無事に目的地へ到着でき、ありがとうございます」と感謝の祈りを捧げていると聞き、目から鱗(うろこ)が落ちました。それからは、私もささやかですが運転する前と後には手を合わせ、心を整えるようにしています。両親の話でしか分からない事実ですが、今こうして命を頂き、心身健康で日々の生活をさせていただけることが、当たり前のようで当たり前でないことを強く実感しています。

ここまで事故を通して気付かされたことについてお話しましたが、ラジオをお聞きの皆さんお一人おひとりが容易ならないところを通らせてもらって、今日この命があると言っても過言ではありません。親先祖から続く命の道のりは、まさに奇跡の連続だと思います。

深呼吸して心臓を触ってみてください。ドクドクドクと鼓動を感じますか？　お母さんのおなかの中から今までずっと止まることなく動き続けて、血液を体中に運んでくれています。心臓に、「ちょっと疲れたから休憩させて」と言われると、たちまち死んでしまいます。同じように、五臓六腑（ごぞうろっぷ）を始め、体の隅々に至るまで、一日も休まず動き続けてくれる命と体の働きに、「ありがとうございます」とお礼を言いたいと思います。

親先祖から続く命の流れの中で、お互い今日を迎えさせていただきました。生きていると酸いも甘いも、良いも悪いもいろんなことが起こってきます。一度しかない人生。これからも賜った命を大切に生きたいと願っています。

では、皆さん、今日も一日、素敵な時間をお過ごしください。



《信心ライブ》

「あなたになら話せる」

おはようございます。

今日は、岡山県浅口市にお住まいの佐藤元子（さとうもとこ）さんが平成29年1月に金光教本部でお話しされたものをお聞きいただきます。

それは私の離婚という失敗から始まっています。

さかのぼること今から17年前、33歳で2人の子どもを連れて戻ってまいりました。当時長男が6歳で、次男は3歳でした。私の心はボロボロでした。何かに必死なのに全く力が出ない。無気力なんです。もう本当に力が出ませんでした。今こうしておりますけれども、外を顔をあげて歩くことができず、うつむいてばかりいました。

そんな私に、金光学園幼稚園の園長先生が、「もう一度幼稚園で働きませんか。あなたにはこの仕事が合っていると思うし、何より2人の子どもを育てていかなければならないよ」と、幼稚園教諭として復帰することを勧めてくださいました。とってもありがたいお話なのに、私はその話をお断りしました。なぜなら当時の私は、自己肯定感がゼロパーセントだったんです。自己肯定感というのは、私は私でいいんだという思いのことです。理由はともかく、妻として失格、大人の都合でわが子を父親のいない子どもにしてしまっているので、親としても失格、

娘として両親を悲しませているのでダメ。つまり私は人間失格だと思っていました。だから、そんな私には園児や保護者の皆さんから「先生」と呼ばれる資格はないと思っていました。何より先生として人前に出るのが、とても怖かったんです。

ある日のことです。うちの前で子ども２人が遊ぶのをぼんやりと眺めていました。近所の同年代のお子さんも一緒でした。そこにある方が通り掛かったのです。Ｔ先生です。私は軽く会釈をするふりをしてうつむきました。

するとＴ先生は、明るいお声でこう仰いました。「お、ええなあ。ここは子育てストリートになっておる。子どもがたくさんおることはいいことじゃなあ」。「えっ」と思いました。「出戻って申し訳ない。情けない」というマイナスの言葉や思いでいっぱいだった私に、Ｔ先生はプラスの言葉を下さいました。私の自己肯定感は少し上向きになりました。

一度は幼稚園の仕事をお断りした私でしたが、やはり生活のためには仕事をしなければならず、次の年に金光学園幼稚園に再就職することができました。そこからもう必死です。先輩の先生に付いていくのに必死。歴史ある園のレベルを落としては申し訳ないと、とにかく一生懸命でした。

担任したお母さんの中にＡさんという方がおられました。ある日、「先生聞いてください」と、私に家庭の愚痴を話し始めたんです。うなずきながらひたすら聞かせていただきました。

その時にAさんが言ってくださった言葉も私を上向きにしてくれました。

「他の先生には話せないけど、元子先生にならば話せる」

私はとても驚きました。「ママ友に聞いてもらったりしないの？」と聞くと、「よそは皆、幸せいっぱいの家庭に見える。だからママ友には話せない」と仰いました。私が存在している意味をAさんによって教えていただいた瞬間でした。つらい思いをしているお母さんのために私のような先生がいてもいいのかもしれない。自己肯定感はまた少し上向きました。

再就職して3年目、園に長くお勤めされているK先生から、ある日こう言われました。「元子先生はいつも笑顔じゃなあ」。実は私は、こう言われるまでいつも笑顔になれていたことに気付いていませんでした。K先生が無意識のうちに笑顔になれていた自分に気付かせてくださいました。褒められると、より一層笑顔になれます。自己肯定感はさらにアップし、物事がどんどん良い方向へ向かっていきました。

「ここには子どもがいっぱいいてええなあ」と言われたこと、「先生にしか話せない」と言われたこと、「いつも笑顔じゃなあ」と言われたこと、今私がここにいるのはこの3つの言葉があったからだと断言できます。

余談ですが、出戻り娘を抱え、心痛めている母にある方がこう泣きながら話されました。「あなたになら話せる」。私は、「先生にしか話せない」と言われましたが、母もまた、「あなた

になら話せる」と、私と同じようなことを言われているんです。きっとその方はそれまでずっと苦しいことを誰にも話せずにいたんだと思います。つらかったことだと思います。離婚はマイナスの経験ですが、つらい気持ちを持っている方たちの救いになれたことはプラスの経験です。離婚したことにも意味があるんだと実感しました。人生において無駄なことはないのではないかと思いました。もちろんこれは私一人の力で思えたのではなく、ここに神様のお働きがあったことは間違いないと思います。

いかがでしたか。

生きていると、いろいろな経験をします。しかし、神様は心を痛めている人ほどかわいいのです。どうぞ助かってくれよと願ってくださいます。だからこそ、人を差し向けてくださるのです。そして、マイナスと思っていた経験が人のお役に立てたなら、その人だけでなく、自分も助かり、神様も喜んでくださいます。

私たちはいろんな経験をしますが、そのつらさに負けずに人の痛みが分かるような味のある人間になりたいものですね。

《もう一度聞きたいあの話》

「ひとことのあいさつから」

島根県・今市教会　森山恵美子

佐藤フクさんは、78歳になる女性です。佐藤さんとは病院の一室で知り合いました。私の親戚のおばあさんが入院している4人部屋の病室に新しく入ってこられたのです。

佐藤さんとは、初め何の会話もありませんでした。入院してきた日から、あいさつをしても返事がなく、毎日彼女の家族が食事の介助にやってきても、何の会話もないまま淡々と食事をし、洗濯物の交換をして帰っていきました。けれども、ある時それは、佐藤さんが話せないのではなく、彼女自身が心を閉じて話さないのだということが分かりました。

病院では、どんな人にも「どうですかー？」「今からお風呂へ行きますよー」と明るく声を掛けます。それに対して言葉が不自由だったり、呼び掛けが分からない人でも、気持ちのいい時はいい顔をし、不快な時には力ずくで意思を表現されます。

しかし、佐藤さんは、いつも軽く首を動かすだけで、ほとんど自分の意思を表に出すことはありませんでした。その姿は、自分以外の者との関わりを断ち切っているように見えました。

私は、やり切れないものを感じると同時に、佐藤さんの声を何とか聞きたいと、あいさつを続けました。「たまたま病室が一緒になった患者の家族」である私に、何ができるわけでもあ

りません。ただ、少しでも心を開いてほしいと願いながら、病室を訪れた時と帰る時は、他の患者さんにもしているように、ベッドのそばまで行って、「こんにちは。お邪魔しますね」「おやすみなさい。また明日ね」と声を掛け続けました。

10日ほど経ったある日のことです。いつものようにおばあさんの介護を終え、「じゃあ、また明日ね」と声を掛け、帰ろうとしたその時、「あなた、お願いがあります」という声がしました。驚いて振り向くと、佐藤さんが手を伸ばして呼んでいます。私は、すぐに彼女のそばへ行き、「何？　何ですか」と尋ねました。すると、驚くほどはっきりとした声で、「ベッドの柵を外して、私を落としてください」と言うのです。そして、「あなたを見込んでのお願いです。私はもう神様のところへ行こうと思います。私など、寝たきりで、自分のことも、ましてや人様のことなど何もできない、生きていてもしようがない者です。神様も喜んで引き取ってくれるはず。最後に父や母のお墓へあいさつをして、神様のところへ行きます。落としてくれさえすれば、はってでも行くから、どうかお願いします」と、すがるように佐藤さんは言いました。初めての会話としては、あまりに重いその内容に、返す言葉が見付かりませんでした。その時の彼女の目には、生半可な言葉では納得しない気迫のようなものがありました。

私は、意を決して、ひと言ひと言かみ締めながら佐藤さんに言いました。「そんなふうに思

うなんて、よっぽどつらいことがあったんでしょうね。でもね、佐藤さん、私にも事情があります。佐藤さんは神様のところに行きたいと言うけれど、私も神様を信仰しているんです。余程の思いで私に話してくださったんでしょう。しかし、私の信仰する神様は、この世界の全ての人間や動物や物を生かし、育んでくださる神様です。私は、今自分が生きているということは、神様が『頑張れ。一生懸命生きて、幸せになれ』と願って働いてくださっているんだと、小さい頃から教えられてきました。私はその神様を信じているんです」。佐藤さんは、話している間中、私の目をジッと見つめてそらしませんでした。私は、神様の思いが伝わるように、祈りながら話しました。「今日、初めてお話しして、私は佐藤さんのことをよく知りません。知らないまま、あなたの願いを聞いて、一つしかない命を絶つ手伝いをしたら、私は信じている神様を裏切ることになるかもしれません。だから、少し待ってくれませんか」と私は尋ねました。そして、「私は毎日、私のおばあさんに会いにここに来ているから、おばあさんのお世話が済んだら、佐藤さんのところへ寄ります。もしよかったら、あなたの話を聞かせてくれませんか？　柵を外すというあなたのお願いを聞くかどうかは、それからでもいいですか？」と尋ねました。

佐藤さんは、しばらく黙っていましたが、やがて大きくうなずいて、「分かりました」と答えてくれました。佐藤さんの目には、いつの間

にか涙があふれていました。

翌日から、佐藤さんは、生まれてから今日までのことを少しずつ話してくれました。生まれてすぐに母と死に別れ、継母に育てられたこと。だまされて借金を抱え、苦労したこと。次々に姉や息子を亡くし、寂しいばかりの日々だったこと。話を聞くうちに、佐藤さんの表情は次第に明るくなり、私が行くのを待っていてくれるようになりました。そればかりか、血色も良くなり、食欲も出て、尿が自力で出るまでに体調も回復していきました。人は、寂しくて死を思うことがあるのだと思いました。佐藤さんは、体は死ななかったけれども、寂しさから自分の心を閉ざしてしまいました。心を閉ざすことは、命を閉ざしていることと同じです。

「あの日から、私の世界が変わったように思います。あなたと会って、生きる楽しみができました」と語る佐藤さんは、今では自分から周りの人に「ありがとう」と声を掛け、病室に飾られた花をめで、食事の後も、「ああ、おいしかった」と家族にお礼を言うようになられました。そして、あの「願い」は、その後、一度も口にされることはありません。

《先生のおはなし》

「大地にひれ伏して」

福岡県・黒木教会　鳥取和道

おはようございます。パーソナリティーの大林誠です。

人間は皆、大地から生じる様々な物を食べ、大地の上で一生を送ります。とかく土は汚いものと見られがちですが、私たちにとって、大地のご恩は計り知れません。金光教の教祖も、あらゆる命の元として、大地に神様の働きを見いだし、こよなく尊びました。

今日ご紹介するのは、「大地にひれ伏して」と題するお話。金光教を伝えるために一人で韓国に渡った鳥取和道さんの体験です。

異なる文化の中での孤独な布教活動を支えたものは、やはり人間はみんな同じ大地につながっているという思いでした。

私は、金光教が韓国に布教拠点を作るために、1995年からの7年間、韓国の首都・ソウルに派遣されました。まずは韓国の文化や風習を理解することから始まり、併せて金光教の教えや信心を韓国語で伝えていかなければなりませんでした。しかし、いざ伝えるといってもそう簡単にはいきません。では何から取り組んでいけばいいのか、模索する日々でした。

そんな中、この天地を美しくありがたく使わせていただく教えが、私の心に留まりました。金光教では天地全体が神様のお体、ご神体とさ

れ、天地を汚すことなく奇麗にすることに努め、自分の心もすがすがしく、心を磨かせてもらうことが大事なのです。そこで、韓国の自宅近所に落ちているゴミを拾い、ほうきで掃き清めることにしました。また、天候に左右されず実践することが大事だと思い定め、雨の日も風の日も行いました。そうして取り組むと、徐々に近所の方々との交流が始まり、会話も生まれてきました。

「なぜ毎日掃除をしているの？」と韓国の方から聞かれます。その時決まって「チョヌン、コンコウキョウ、インミダ（私は金光教です）」と伝え、生かされている感謝を込めて天地自然を美しくさせてもらっていることをお話しました。

韓国で「金光教」という名前を伝えさせていただくだけで、とてもありがたい気持ちが込み上げるのでした。そのことがうれしく、早朝の掃除だけではなく、夜間も始めることにしました。掃除の場所は自宅から20分ほど歩いた小高い丘にある公園でした。最初その公園を見て、とても驚きました。方々に大量のゴミが散乱し、トイレも汚く荒れ果てていました。「よし！この公園で新たな実践に取り組ませていただこう」と決めたのでした。

翌日から、公園の掃除を始める前に、「未来ある子どもたちがこの公園を明るく元気に気持ち良く使わせていただき、世の為、人の為にお役に立つ子どもたちになりますように」と願いを込めて掃除を始めました。掃除が終わると、

市内を一望できる場所を選んで大地にひれ伏し、生かされている感謝と、再び子どもたちのことを祈りました。冬の冷たい日でも、大地にひれ伏していると次第におでこが温かくなります。じっと目を閉じ、「この天地の中で人は皆生かされ、そしてこの大地は世界中につながっている。私は韓国で一人ではない。生まれ育った実家にも、金光教の御本部にもつながっているんだ」と次第に感動するようになったのです。

ところがある日、「父が脳血栓で倒れた」と九州の母から電話が入りました。母からは「すぐに日本に帰ってきてほしい」と言われました。電話の後、帰るべきか残るべきか、大変悩みました。今帰ってしまうといつ韓国に戻れるか分かりません。韓国の方々との交流も途絶えてしまいかねません。どうしてよいか分からず、しかし何か行動せざるを得ない思いで始めたのが「ドブ掃除」でした。ドブの詰まりを父の血管が詰まっている所と思って、町内中のドブを必死に掃除して回ったのです。せめてもの思いでした。

そんなある日のこと。それでも悩み続けていた私は、掃除を終え、いつものように大地にひれ伏していると、「神様、父が助かるのであれば、この曇り空の中に星の光を見せてください」という思いがふと心に湧きました。一心に祈り、ふと頭を上げて夜空を見ると、私の頭上に一つの輝く星が見えます。私は身震いしました。「お父さんのことは心配せず、韓国の地でやるべきことをやりなさい」と神様が言ってくださって

いるように思え、感極まり、大地に涙しました。母に電話し、「どうしようか大変悩みましたが、すいません、やはり今帰ることはできません。韓国の地から必死にお祈りしています」と伝えました。

その後、父は医師も驚くほど元気になり、車の運転もできるほど回復したのです。

こうして私は、7年間の韓国派遣を終えて帰国することとなりました。現在、生まれ育った九州の教会で奉仕しています。韓国で大地にひれ伏し、祈り続け、汗と涙の染み込んだ公園の土の感触を思い起こしながら、韓国の皆さんのこともお祈りしています。

そして今も、教会の周り、町内の掃除に努めて、草取りや木々の手入れをしたりお花を植えたりと、皆が気持ち良く癒やされるようにと願い、行っています。

全世界の皆が、この天地の中で生かされています。この天地自然に感謝を込めて、大地を美しくさせていただき、人類皆で助け合い、祈り合う世界が生まれたらと願っています。

大地から生まれ、大地の上で生かされ、また大地に帰って行く人間同士。そんな思いで世界中の人々が心を通わせていけるといいですね。

鳥取さんの努力が礎となって、現在、韓国でも金光教が着実に根を下ろし始めています。

《先生のおはなし》

「おめでとう！」

大阪府・鳳（おおとり）教会　工藤（くどう）由岐子（ゆきこ）

人生にはいろいろな出来事があります。今日は、私が今まで言えなかったことを、思いきって話そうと思います。

私が結婚しましたのは、今から30年前の23歳の時です。そして、結婚と同時に、夫の両親とも暮らすようになりました。もうその両親は他界しましたが、同居生活の20年間は、私にとって忘れられない経験となっています。特に舅（しゅうと）との関係に苦しみました。

夫の父は勤勉で、博学でしたが、昔気質の封建的なところがありました。お嫁に来て、最初に注意を受けたのは、私が先に赤ちゃんをお風呂に入れたことでした。いつもは義父が一番に入りますが、その日、夫の母が私に、「赤ちゃんを先に入れてあげて」と言ってくれましたので、その言葉に甘えました。たぶん義母は、赤ちゃんのためを思って、「先にそうして」と言ってくれているようでした。ところが、子どもをお風呂に入れた後、義父がやってきて、「今度からワシが先に入る！」と叱られました。それ以来、子どもは、一番風呂の義父に入れてもらうことになりました。嫁は絶対に最初に入ってはいけませんが、息子である夫なら良いようで、夫が家にいる時は、夫に入れてもらうようにしました。私は核家族の家庭に育ったのですが、実家の父は、いつも最後にお風呂に入って

いましたので、ささいなことですが、ギャップを感じました。一事が万事です。

もちろん、同居して良かったなと思うこともあります。それは、夫の父も母も、子どもの面倒をよく見てくれましたので、私は子育てに煮詰まることがなく、ゆったりと2人の子どもたちと接することができました。子育てに関する口出しもされませんでしたので、その点も助かりました。ただ義父は、孫や夫には甘かったのですが、私に対しては厳しいと思いました。嫁を育てようと思ってくださっていたのでしょうが、それがかえって、私の負担になっていました。

一番つらかったのが、姑（しゅうとめ）が亡くなってからです。ちょうどその頃、実家の母が、くも膜下出血で入院していましたので、兄弟がいない私は、看病と病院の対応にも追われていました。病院通いにはエネルギーを使います。ヘトヘトで帰宅しましたら、デンと座っていた義父が私に、「洗い物の食器が残っていますよ！」と言うのです。そんな中、夫は家事を協力してくれるようになり、家の洗濯物を取り入れて畳んでくれましたが、それを見ていた義父が、夫にではなく、疲れて帰ってきた私にこう言います。

「一家の主人に洗濯物を畳ませるとは、どういうことや！」。

それを聞いて辛抱できなくなった私は、初めて義父に言いました。「嫁の体はどうなってもいいんですか！　私もいっぱいいっぱいなんです！」。

しかし、その後、義父は末期がんになりました。日に日に弱っていきました。私を呼びます。「ゆっこさん、トイレに連れて行ってください」。歩けなくなった義父が、私の背中に覆いかぶさってきた時、「あんなに強かったお義父さんが…」と、義父の病の重さを感じ、ショックを受けました。義父は、「お世話になります」と言いました。絶対に弱いところを見せなかった義父が、振り絞ってそう言ったように聞こえました。

ちょうどその頃、娘の高校受験が近付いていました。私立高校には受かりましたが、できれば希望の公立高校に行けたらなと願っていました。ただ、その志望校は競争率がとても高くて、娘の学力では、五分五分のようでした。しかし、私立は先に合格していますので、チャレンジすることにしました。

そして受験の日の朝、ベッドで療養していた義父が、娘に、「頑張って！」と声を掛けてくれました。孫娘のことを心から応援してくれました。ところが、結果は不合格でした。娘と一緒に、高校まで発表を見にいきましたが、番号がなかったのです。五分五分だったとはいえ、期待を持っていましたのでショックでした。まず夫に電話をして、つらかったのですが、義父に伝えてもらいました。

その後、何とも言えない気持ちで家に帰り、「ただいま」と言って、真っ先に義父の所に２人で行きました。うつむいていますと、義父が発破を掛けるように娘に、「おめでとうや！」

と言いました。通う高校が決まったから、おめでとうと言ってくれたようです。でもこのタイミングで、「何がおめでとう？」と思いそうですが、病床の義父から言われますと、力強さがあり、おじいちゃんとしての思いも伝わってきて、娘も私も泣きました。娘は後から、「おめでとうと言われたことは一生忘れない！　おじいちゃんもつらいはずなのに、私を励ましてくれたから」。こう話していました。

娘が通うことになった私立高校は、実は、義父の母校でした。入学式の日、娘はピカピカの制服を着て、ベッドで寝ている義父の横に立ち、ツーショット写真を撮りました。義父は孫娘の晴れ姿を見て、うれしそうに笑いました。昔の母校の話もしてくれました。そして4月の15日、お庭の桜の花が散るのと同時に、義父は穏やかに息を引き取りました。

あれから11年になります。娘はもう27歳で、希望した会社に就職しています。「受験シーズンが来るとあの言葉を思い出すね」と話しています。いろいろなことがありましたが、経験は全て無駄になっていません。未熟だった私を、神様が義父を使って育ててくださったのかなと、今はそう思えてなりません。

《信心ライブ》

「華麗なるダイビングキャッチ」

おはようございます。

今日は、山口県・下田（したた）教会の野中栄（のなかさかえ）さんが、令和元年9月、広島県で行われた集会でお話しされたものをお聞きいただきます。

一昨年の春、栄さんのご主人は網膜剥離（もうまくはくり）を患いました。手術によってどうにか無事に回復されましたが、安心したのもつかの間、今度は右肩を複雑骨折してしまいます。

骨折した時、栄さん夫婦は、山口県内の教会の先生や信者さんたちが集まって行われたソフトボール大会に参加していました。栄さんは、その時ご主人に寄り添う中で感じたことをお話しされました。

楽しいソフトボール大会の時ですが、主人がピッチャーをしていて、バッターが打ったボールを張りきって取りにいくと、肩から地面に落ちてしまい、右肩鎖骨複雑骨折。主人いわく、頭の中では華麗なるダイビングキャッチを描いていたそうですが、華麗なるダイビングキャッチをしていた時からすでに30数年が経っていました。気持ちは10代だったらしいです。体は50代。正直ですね、体は。

私が運転する車で、すぐ近くの病院で診察を受けました。私は廊下で待っていたのですが、待てど暮らせど主人が診察室から出てきません。主治医の先生の声は聞こえるんですが、け

がとは別の話で、先生が「研修生がああだこうだ。言うこと聞かんで、ああだこうだ」と言ってるのが何となく聞こえてくるんですね。後で主人に聞きますと、診察していただいている先生の相談を聞いてあげていたらしく、骨折している大変な体なのに、親身になって聞いてあげている主人の優しい心に、私の心も温かくなりました。

診察が終わり、私としてはせっかくのソフトボール大会を残念な雰囲気、台無しにしてしまったことが大変申し訳なく、それでも戻らなくちゃいけないと思って、主人を連れてソフトボール場に戻りますと、私たちが病院から戻ってくるのをずっと待っていてくれた教会の先生方、信者さんたちが心配そうに、また何事もなかったように楽しい雰囲気で待っていてくれて、その優しいフォローが私の心に伝わり、思わず涙があふれそうになりました。

また、「主人の骨折が、ここで、この場所でよかった。ありがたいな」と思いました。一緒にソフトボールに来ていた息子も、「みんな優しくて、良い方ばかりだね」と言ってくれたことに、私が褒められたわけではないのに、すごくうれしく、主人は大けがをしているのに、普通だったらショックに打ちひしがれ、どんより暗くなりがちですが、車の中は心配もなく、温かい雰囲気で包まれていました。これは、皆様の心の温かさを頂いたからなんだなって、後でしみじみ感じていました。

9月5日、柳井の病院に入院。9月6日手術。

山口県東部連合会の信奉者集会なので、主人は神様と執刀医の先生にお任せして、私は信奉者集会に出席することにしました。集会の閉会式のあいさつをする前に、執刀医の先生から手術が無事に済んだ安心のお電話を頂き、ホッとしたのを今でも鮮明に覚えています。

「ああ、どうして神様は、信心しているのに難儀を私に与えるんだろうか」と、信心が分からない時は、良くない出来事は全部誰かのせいにしたり、不平不満ばかり口にして生活を私は送っていたような気がします。

でも、信心を少しずつ教えていただいている私には、この1年間は喜びでいっぱいでした。なぜかと言いますと、今までに、主人にはいろいろと助けていただいていて、主人が大変な時こそ、私が手となり、足となり、力になり動かせていただいていることができるありがたさのほうが勝っていたからでした。

信心して心のお育てを頂きますと、自分の口から出る言葉が良くなってきて、言葉が良くなれば、周りの接していただける態度が良くなり、周りが良くなれば、自分も良くなる。神様を信心すれば、自分が神様のおかげで変わらせていただき、それを感じた周りがまた変わっていき、良いほうへの連鎖が生まれていくという、神様のおかげは無限につながっていくということを、身をもって感じております。

いかがでしたか？

ご主人が骨折をされた大変な出来事でした

が、栄さん夫婦にとっては、周りの方々の温かい心をキャッチされたソフトボール大会だったようですね。

信心していると、難儀なことは起こらず、良いことばかりがあると考えがちですが、信心していても嫌なことやつらいこと、難儀なことが身に起こってきます。ただ、信心には、難儀なことが起きても乗り越える力があります。栄さんも、信心しているからこそ、難儀なことに出遭った中にも喜びを見付け、ありがたい心持ちになれたのですね。

栄さんは、「周りの人の協力があって自分も支えられ、生かされていることが分かってきました」と語っています。喜びに満ちた栄さんの生き方もまた、周りの人たちの心を和ませ、生きる力を与えているのだと感じました。

《先生のおはなし》

「神様は親」

東京都・麻布教会　松本信吉

おはようございます。東京都・麻布教会の松本信吉、52歳です。私は、23歳の時に金光教教師となり、33歳から3代目の教会長として奉仕をさせていただいております。1つ年下の妻との間に、17歳の娘と13歳の息子がいます。

今日は金光教の神様、天地金乃神様についてお話ししていきたいと思います。この神様は絶対的な、完全無欠の何でも願えばかなえてくれるという神様ではありません。むしろ慈愛を持った「親のような神様」だと私は思っています。

私には現在高校2年生になる娘がおりますが、その娘が中学校卒業の時の「両親への感謝の手紙」の中で、「私はお父さん、お母さんの子どもに生まれてきてよかった」と書いてくれました。私も妻も大変うれしく思いました。

私は娘が生まれて初めて親になりました。その成長の過程では、受験や人間関係に悩んだりと、様々なことがありました。毎朝、電車で40分掛けて高校に登校しますが、今日も事故、けが、トラブルや病気なく、つらいこと、悲しいことなく、先生、友達と無事安全に過ごせますようにと祈ります。ここまでもいろいろな壁にぶつかりましたが、その時々に娘のことを祈り、共に壁を乗り越えていくことによって、親の心も助かっていきました。私はそのことによって、天地金乃神様が私たちをどんな思いで守ってく

ださっているか分かるような気持ちになったのです。

そして「私は天地金乃神様の子どもでよかった」と思いました。

金光教では、天地金乃神様を「親神様」と呼びます。まさしく親あっての子ども、子どもあっての親。それと同じように、神あっての私たち人間、人間あっての神様なのです。親が子どもを愛し、子どもが親を慕うように、神が人間を慈しみ、人間が神を慕う。それが金光教の信心です。

私は、金光教だけでなく、世界のどんな神様も人間が幸せであることを願ってくださり、氏子から、「私はあなたの子どもでよかったです」と言われれば、きっと喜んでくださると思うのです。

わが家の下の男の子は、中学1年生になりましたが、この子が1歳10カ月の時、大やけどをしました。ヨチヨチ歩きの長男が、妻がちょっと目を離した時に、台所のカウンターの上にあった沸かしたてのコーヒーメーカーの取っ手に手を掛けてひっくり返り、熱湯をかぶったのです。異様な泣き叫ぶ声に、私が台所に駆け付けた時には、割れたガラスと湯気の立つコーヒーをかぶった長男が泣き叫んでいました。急いで服を脱がせて、真っ赤になった左肩から腕にかけて、「神様」と願いながら冷水を掛けました。すると、柔らかい肌がめくれ、肉が見えました。泣き叫ぶ長男を御神前で「神様」と抱きかかえながら祈り、車に乗せて最寄りの病院へ妻と向

かいました。

「大やけどをしています！　何とか治療してください」

しかし、その病院では手に負えないので1キロ先の大病院へ運んで、1カ月の入院治療となりました。頭や顔は大事ありませんでしたが、全身を包帯で巻かれた長男の姿は本当にかわいそうでした。私も妻もこの時ほど、「この子と代わってあげたい」と思ったことはありません。

同じように、天地の親神様は、危なっかしい私たちをいつも見守ってくださり、つらい時には痛みを分かち合ってくださっておられるのだと思います。

大きくなってやけどの痕のことでいじめられないだろうかと心配もしましたが、小学校もいい友達や先生に恵まれ、今は中学校の野球部に入って、毎日楽しく練習に参加させていただいています。日曜日に試合のある日は、グラウンドに応援に行きます。パパ友達と共に子どもたちを応援し、ヒットを打つと肩をたたき合って喜びます。

10数年前、大やけどをした時には想像もできなかったくらい元気に育ち、やけどの痕は残っていますが、みんなと楽しく野球ができていることを神様にお礼を申し上げる毎日です。

かく言う私も、小学校3年生の時に突然胃けいれんを起こし、締め付けられるような痛みで七転八倒し、苦しみました。その時、両親と祖父が神前で神様に必死で祈ってくれたことを覚えています。あの時の両親や祖父の祈る後ろ姿

は今でも忘れることができません。まさしく理屈抜きに、「この子の痛みをとってやってください」と神様にすがる姿でした。

あれから40数年経った今、私は毎朝バトンケースと重たいカバンを抱える娘と、バットケースと重たいリュックを背負って登校する息子の背中に手を合わせ、今日の無事安全を願います。そして、天地金乃神様が今日も同じように私たちを見守ってくださっていることに感謝の祈りを捧げ、信者さんや関わりある方々の幸せ、そして世界の平和を願います。

教会は人間の思いを神様に届け、神様の思いを教えてくれるところです。神様は親のように私たちを守ってくれます。あなたも近くの金光教の教会を訪ねてみませんか？

《信心ライブ》

「足もと」

おはようございます。

今日は、鹿児島県・上荒田（うえあらた）教会の宮内英児（みやうちえいじ）さんが、令和元年7月に金光教本部でお話しされたものをお聞きいただきます。

12月の半ばに、慌てておりまして、よくある3段ボックスで右足の薬指を思いっきり打ったんです。転びはしなかったんですけどゴンと打って、それがずっと痛かったんです。年末にそういうことがありまして、始めはまあよくあることで打撲だと思っていたんです。あざができて、1週間ぐらいすれば治るだろうと思っておりました。ただ1週間経っても治らない。私は都合の良いように考えまして、とりあえず先が曲がらないし、突き指だろうと思いました。しかし、2週間経っても治りません。そのうちに大みそかがくるんですね。大みそかまで治らなくて、その間ちょっと打っても激痛が走るんですね。声が出ないくらいに激痛が走って、ああ痛いと思っていました。

大みそかでした。ちょうど息子たちが、「お父さん、今年もありがとう」と言ってくれたんです。まあうれしいひと時で、ハグしてくれというふうに手を広げてきたので、「ありがとうね」と言いましたが、子どもたちがワーと来たんですね。足を蹴られまして、息子に。本当に痛くて、「くー」と言ってこの場に倒れ込みま

した。息子たちは「ごめん、ごめん、ごめん」と謝るんです。これはいかんと思いました。息子たちに心配をさせてもいかんし、指も痛すぎると思いまして、年が明けたらすぐ病院に行ったんです。そうしたら、足の薬指にヒビが入っていると言われまして…。

足の指を骨折し、痛みを感じながらひと月を過ごした宮内さん。その間、自分が普段足元をおろそかにしていたことに気付いて反省し、何かできることはないかと考えた結果、まず履き物をきちんとそろえることに取り組みました。

履き物をそろえるというのは難しくないことです。ただそろえればいいのですけど、そのうち息子たちもそろえてくれたらいいな、きちんと心が整ってそろってくれたらいいな、家族が同じ方向を向いてそろってくれたらいいな、というふうに思ったのです。

来る日も来る日も、「履き物そろえてよ。そろえてよ」と言いましたが、一向に子どもたちはそろえることがありませんでした。そのうち腹が立ってきて、帰ってきて玄関開けるなり、「おまえら、履き物そろえろ！」と怒鳴るようになってくるんですね。もうビックリして子どもたちは玄関まで来て「おかえり」と迎えにくるんですけど、「あっ、ごめん。今そろえる」と言うものの、怖がるようになってくるんです。それを見て、本来ならば履き物までそろえる余裕、心の整った姿というのを目標としているの

にもかかわらず、自分自身は履き物をそろえるということに執着し固執して、それができなければ絶対いけないと、そこしか見えてなかったのですね。そんなところに私は気付かせていただきまして、これはいかんと、自分自身がそのことでかえって余裕がなくなってきているというふうに思うんですね。だから、「何回かは、子どもたちに怒鳴ること自体を止めよう。そう思うんだったら、自分が願いを込めてちゃんと子どもたちの分までそろえてあげよう」というふうに思いました。

そうして自分で家族全員分の履き物をそろえるようにしだしました。次第に履き物を毎日そろえていると、子どもたちの靴、妻の靴に砂が入ってたり、汚れていたり、濡れていたり、かかとが潰れていたりとか、靴にいろんな特徴というか跡が付いているのです。触ってみると、ちょっと温かかったりする。その印を見て、靴が私の知らない家族のこと、姿というものを教えてくれるんですね。それはありがたいことでした。そういうふうに思わせていただくと自然に靴に対して、「今日もありがとうございます」という気持ちになってきて、「今日もお守りいただいてありがとうございます。どうぞ、また気持ちがそろって、また明日、ここから進んでいけますように。おかげを頂きますように」というふうに、お礼の気持ちが出てまいりました。

いかがでしたか。

この後、息子さんたちは自然と履き物をそろえるようになりました。時には、子ども同士で、「自分が靴をそろえるんだ」と競い合うこともあるそうです。

自分で靴をそろえ始めたことから、いろいろなことに気付くことができ、神様に感謝する宮内さん。日常生活のささいなことから始まった行いが何かを気付かせ、手元足元が整っていく。それは、靴をそろえること自体が目的なのではなく、そのことをとおして自分の足元を見つめ直しているんですね。

そう考えると、私たちの日常の中には、心が豊かになるための材料が、ここにもそこにもたくさんあるのだと思います。

《金光教案内》

「かんべむさしの金光教案内Ⅱ 第1回」

おはようございます。かんべむさしと申します。職業は作家でございまして、日本文藝家協会と日本ＳＦ作家クラブの会員になっております。年代としては、「団塊世代」の一員で、40代の後半から大阪市内にあります金光教玉水（たまみず）教会という、明治時代からある教会に通わせてもらっております。

そんなわけで、今朝から週1回で4週にわたって、お話をさせていただくことになりました。どうぞよろしくお願いいたします。

で、今40代の後半からと申しましたが、それまでの私は、本当に平均的な日本人で、宗教には何の関係もない人間でした。ただし、若い時代から本を読むのは好きでしたし、気が弱くて心配症という、常に不安を抱えてるような性格ですから、その解決を求めていろんな本を読んだりはしてました。

その中の1冊に、漫画家のサトウサンペイさんが書かれた、『ドタンバの神頼み』という本がありまして、これで私は、初めて金光教という宗教を知ったんですね。

そして40代に入ってから、出版業界が長期不況に陥ったり、親族間でトラブルが続いたり、公私共にいろんな問題に見舞われだして、心が疲れ果てるという状態になりました。その結果、

サトウサンペイさんの『ドタンバの神頼み』を改めて読み直して、そこで紹介されてた金光教玉水教会へ通わせてもらうことになったんです。ですから私は、金光教という宗教に人生の途中から入った人間です。

でも、途中から入ったにせよ、もう20何年通ってる計算になりますから、「そしたらあなたは、熱心な信者さんなんですね」と言われるかもしれませんが、実は私は、あんまり熱心な信者ではありませんし、良い信者でもありません。これは別に謙遜して言ってるわけではなくて、本当にそうなんです。

というのが、もともと理屈っぽい性格でもありますので、どんなことでも、考えて確かめて、自分なりに納得してから、ようやく受け入れる人間なんですね。

そして作家という仕事柄、世の中の常識とか、それこそ「平均的な日本人」の価値観というものも、常に自分の中に持っていなければならない。また、例えば金光教で教えてる神様なら神様についても、作家としては、「これを、宗教を敬遠したり、警戒心を抱いてる世間一般の人に、どう説明したら、理解や納得をしてもらえるかな」と考えることも、いわば仕事上の癖になってる。

だからその分、信者としては理屈が多すぎてなかなか先へ進まないという、そういう意味で、あんまり良くない信者なんです。その代わり、自分で納得できてないことは言いませんから、その点は信用してください。

さて、そんな理屈っぽい私が、金光教に魅力を感じて、教会へ通わせてもらうようになったのは、まずこの宗教が、優しくて穏やかで、間口の広い宗教だと感じたからです。

例えば、他の宗教を否定せず、共存共栄を良しとしてますし、教団として、特定の政治的な立場は取らないことになってますから、その面で干渉されることもありません。

また、寄付や献金の強制がありません。教会にさい銭箱は置いてありますし、「お供え」という慣習もありますが、出そうと出すまいと全く自由です。信心を続けるかどうかも自由で、本人の自覚に任されてます。その意味では、まあ、さっぱりした宗教です。

そして何よりも、「取次（とりつぎ）」ということをしてもらえます。取次というのは、教会の先生が、私なら私の悩み事や願い事を聞いてくださって、その解決や成就を神様に祈ってくださる。そして、それについての神様の思いや願いも教えてくださることですが、これが私にとっては一番の魅力要素だったんですね。

身勝手な言い方になりますが、自分にとって、「非常に都合のいい宗教だな」と、そう思いました。実際、40代後半のその時には、トラブル続きで困ってたんですからね。

そして、こういった特長や、優しくて穏やかな雰囲気などは、教祖様以来の伝統として伝わっていることです。金光教は江戸時代の終わり頃、備中大谷、今の岡山県浅口市金光町で始まった宗教でして、教祖様…私としては、「様」

と言うより「さん」と言わせていただきたいのですが、その教祖さんは、元は農業をしておられた方です。

さっき言いました取次も、その教祖さんが神様からの指示に従って始められたことで、金光教の教典にはその具体例がたくさん載ってますが、それらも本当に親しみやすくて安心のできる雰囲気です。そして、その教祖さんが教えておられる神様もまた、優しくて穏やかな神様なんです。

というところで、時間が来たようです。来週は、今申しました教祖様や神様について、もう少し詳しく紹介させていただこうと思います。

どうもありがとうございました。

《金光教案内》

「かんべむさしの金光教案内Ⅱ 第２回」

おはようございます。「かんべむさしの金光教案内」。先週は、私が金光教の優しくて穏やかな雰囲気とか、こちらの抱えてる問題の解決や成就を神様に祈ってもらえる「取次」ということに魅力を感じたお話をいたしました。そこで今朝は、その金光教の教祖様や神様について、紹介させていただきます。

金光教は江戸時代の終わり頃に、備中大谷、今の岡山県浅口市金光町で生まれた宗教です。農村地帯ですから教祖…様失礼して「教祖さん」と呼ばせていただきますが、その教祖さんも、元は農業をしておられた方です。

子どもの頃から、神社に参ったりするのが好きだったそうで、正直で温和で真面目に働くので、村の人たちからも信用されてました。

しかし、子どもを２人、３人と亡くしたり、農家にとっては家族同然の飼ってる牛が２頭も死んだり、おまけに自分も大病をしたり、難儀なことが次から次へと起きてきました。

もちろん、そういったことについては医者を頼み、神仏に願い、人から勧められることも実行しましたが、当時のことですから、その勧められることというのは、やれ「方角を見よ」とか、「日柄を調べろ」とか、「厄除けをしろ」とか、今の感覚で言えば迷信が多かったんです

ね。

でも、そういったことは、神様から見れば、人間の身勝手な、無意味な気休めにすぎないのだということを、教祖さんは自分の大病をきっかけに、神様から直接教えてもらえだしました。そして、その要点を言いますと…。

例えば病気を治してほしいのなら、「どうぞ治してください」と、なぜ神に素直に願ってこないのか。人間のことだから、罪なこと無礼なこともするだろうけど、それも素直にわびてくれば、すぐに許してやるのに…。

日々、生きさせてもらってることにお礼を言い、悪かったと思うことにはおわびをして、そしてその上で、どんなことでも願ってくれば、解決や成就に向けて、神が引っ張っていってやるのに…。

とまあ、そういう思いを、神様から伝えてもらえるようになったわけで、これは教祖さんの神様を敬う心が、それだけ強くて、本物だったからでしょう。

そして、その神様というのが、金光教では「天地金乃神」と称されております、天地源の神様です。形が無くて姿も見えないけど、天地…つまりこの宇宙に満ち渡っておられるという、大きな神様です。

その神様から、「人間あっての神、神あっての人間。どちらが欠けても、両方が立ち行かないのだ」という、神と人との本来の関係を、皆に教えてやってくれと頼まれた。

神は人間が生まれる時に、タマシイ、みたま

を分け与えてやっており、それが人間の本体である。肉体の親は両親だが、本体の親は神なのだ。その親である神の子ども…つまり人間ですね…人間に対する、より良く生きてほしいという思いや願いを人に伝え、また人の悩みや願いをそちらからも神に伝えて、解決や成就を祈ってやってくれ。そしてそれによって、この神の人に対する働き掛けを助けてくれと、そう告げられた。

それが「取次」ということで、教祖さんは最初は農業をしながら、後には農業をやめて、それに専念されるようになりました。その結果、多くの人が助かり、ご自分の信心も進んで、最終的には「生神金光大神」、大きな神と書いて大神ですが、そういう名前を神様から与えられたんです。

ただしこの生神は、いわゆる「生神様～！」という、その生神ではなくて、信心のレベルを高められた結果、ここに新たに「神が生まれた」のだという、そういう意味が込められた「生神」で、だから教祖さんは信者たちに、皆さんも信心を進めればそうなれますよと教えておられます。

で、これらの教えやエピソードは、一見ローカルな、世俗的な、民間宗教のようですが、時代性とか地方色を消して本質を抜き出せば、いつの時代にも、どこの国でも通用するものだと、私は思いました。

つまり、この宇宙を成り立たせてる大いなる存在があり、それを人間は神と称してる。そし

て、その大いなる存在から言われて、その意思を人々に伝え出した人がいた…とまあ、そういう構造なんですから、これは古今東西、多くの宗教に共通している本質でしょう。

そして私は、その構造や本質の具体例として、穏やかで優しい雰囲気の金光教に、言葉は不適当かもしれませんが、「相性が良さそうだなあ」と、そう感じたわけです。

ですから私は皆さんに、「金光教でなければならん」と押し付ける気は全くありません。もし、人生の道筋で宗教が必要になってきたら、皆さんそれぞれが、本質を押さえていて、同時に相性の良い、そんな宗教を探されたらいいと、そう思ってるんです。

というところで、時間が来ました。来週は、さっき申しました「取次」について、具体例なども交えて、お話をさせていただきます。

ありがとうございました。

《金光教案内》

「かんべむさしの金光教案内Ⅱ第３回」

おはようございます。「かんべむさしの金光教案内」。３回目の今朝は、金光教の大きな特長の一つである、「取次」ということについて、お話をさせていただきます。

金光教の教会は、全国各地どこの教会でも、入りますと正面が神殿で、その右手側に先生が座っておられます。その先生に参拝者は、悩みでも願いでも、どんなことでも相談させてもらえます。これは、金光教のことなど何も知らないという、全く初めての人でも、何の遠慮も要りません。私も最初はそうだったんですから、体験者として保証いたします。

で、そうやって相談させてもらいますと、それに対して先生は、何かのトラブルならその解決を、願い事ならその成就を、神様に祈ってくださいます。そして、その解決や成就のために、こちらはどうすればいいのか、どんな思いで、どういう対処姿勢でやっていけばいいのかも教えてくださいます。

ただしそれは、その先生個人の考えではなく、神様の思いや願いを基礎にした、いわば神様からの助言です。つまり先生は、こちらの願いを神様に取り次ぎ、神様の思いや願いもこちらに取り次いでくださるわけで、それでこれを、「取次」と呼んでるわけです。

この取次は、金光教の教祖様が、神様からの指示で始められたことで、幕末以来今日まで、全国どこの教会でも、ずっと続けられています。教祖さんは、「どんなことでも願え。箸の転んだようなことでも願え」とか、「神は願われるのが役目である」と教えておられまして、ですから熱心な信者さんほど、本当に細かいことまで、先生にお願いしておられます。

もちろん、どんな内容でも秘密は固く守られますし、お願いしたからといって、お金を請求されることもありません。

で、その「取次」を具体的な例で紹介いたしますと、たとえば学生の信者さんが、もうすぐ就職試験を受けるとしますね。それで緊張して、不安で仕方がないので、教会に参ってきて、そのことをお願いしたとします。

そしたら先生は、その場で祈ってくださったり、あるいは夜中、深夜に願ってくださったり、とにかく無事に合格させてやってくださいと、神様に祈念してくださいます。そしてその学生君には、こんなふうに教えられます。

まず、緊張して不安で仕方がないのは、あなたが本気で試験に当たろうと思い、その準備も進めてきた証拠ですから、それは気にしなくてもよろしい。ただし、そうやって準備を進めてこれたのは、家族や友だちや学校の先生の、協力や助けがあったからです。だから、それを忘れず、そのことに感謝しながら試験に当たれば、神様は必ず支えてくださいますから、安心して受験してきなさい。

とまあ、こんなふうに教えてくださり、さらには、「これまで勉強してきたことを、よく思い出せて、正しい答案を書かせていただけますようにとお願いしなさい」とか、「合格して入社できたら、真面目に働いて、自分の役目を果たしますと、神様にお約束をさせてもらいなさい」とか、そういうことも言ってくださるかもしれません。

そして、私の経験で申しますと、こうやってお取次を願って、その内容を先生にお話しさせてもらいますと、まず、聞いてもらえただけで気が楽になるという、そういう効果がありますね。これは、悩み事をカウンセラーに聞いてもらう場合と似てるわけです。

ただし、取次の場合はさっきも申しましたように、神様の思いや願いを伝えるという、その立場からの助言ですから、相談する内容によっては、「あなた自身も、もっと努力しないと、神様もその願いをかなえてやりようがないと仰いますよ」とか、「そのトラブルがなかなか解決しないのは、自分もこれこれこういう点を改めなさいという、神様からの御催促です」とか、なかなか厳しいことを教えられる場合もあります。

それから、悩み事でも願い事でも、思いも寄らない解決や、奇跡的な成就を与えてもらえたという、そういう話は他の宗教にも沢山あるでしょうし、金光教にもいくらでもあります。ただし、教会の先生が取次をされる時、神様に「奇跡そのもの」をお願いするわけではないそうで

す。信者さんのために解決や成就を願い続けていたら、時には神様が、奇跡的な解決を与えてくださる場合もあるという、そういうことだそうで。

もちろん問題にもよりますが、そもそも本人の努力が必要なことに関して、安易に奇跡的な解決を願うのは、楽して成果を得たいという気持ちの表れだから、それは神様には通らない。祈りや願いには、自分の努力や改まりが伴ってなければならないということで、金光教は、穏やかで優しい宗教ですが、同時に厳しい面もある宗教なんです。

はい。というところで時間が来ましたので、来週は最終回ですから総集編として、もう少し金光教の特長をお話させていただきます。

どうも、ありがとうございました。

《金光教案内》

「かんべむさしの金光教案内Ⅱ第４回」

おはようございます。「かんべむさしの金光教案内」、その最終回でございます。

第１回目では、私が、漫画家サトウサンペイさんの『ドタンバの神頼み』という本で、初めて金光教という宗教を知ったこと。その後、40代半ばから、仕事上や生活上のトラブルが続いて心が疲れ果てて、それでサトウさんの本で紹介されてた、大阪市内にある金光教玉水教会という教会に通わせてもらいだしたことなどをお話ししました。

そしてそれは、金光教が穏やかで優しい宗教で、他の宗教を否定せず、共存共栄を良しとしていること。寄付や献金の強制もないし、信心を続けるかどうかも本人の自覚に任されてること。そして何よりも、こちらの悩み事の解決、願い事の成就を神様に祈ってもらえ、神様の思いも伝えてもらえる、「取次」ということをしていただけること。そういった点に魅力を感じたからでした。

で、その間、作家という仕事柄もあって、他の主立った宗教の入門書なんかも読みまして、自分なりに得心したこともありました。

というのは、いくつもの宗教が神というものを、形もなく姿も見えないけど、この宇宙に満ち渡ってる存在なのだと、そう教えてるんです

ね。ですから私は、「そうか。別々の宗教が同じ存在、つまり、大いなる意思のようなものを神と称して、それと人間との関係を説いてるのか。その神様の名前とか、教えの内容がそれぞれ違うのは、時代や国柄や教え始めた人による、捉え方とか道筋の違いだと解釈すればいいんだな」と、そう思いました。

また宗教以外でも、インドの正統的なヨガは、神という言葉は使わないそうですけど、同じ存在を、「気」とか「宇宙霊」と称したりしてる。遺伝子の研究をしてる最先端の科学者が、やっぱり理論を超えた存在があると実感して、それを「サムシング・グレート（偉大な何か）」と、エッセイに書いたりしておられる。これも、捉え方の違いですよね。

さらに、金光教関係で言いましても、ある教会の先生が書かれた本に、「金光教の神を語るではなく、金光教で神を語る」という言葉が出てきました。また、関西金光学園という学校法人がありまして、大学・高校・中学校を運営してますが、そこの宗教教育でも、「金光教のことを教えるのではなく、金光教で教える授業を目指してる」という、そんな方針をお持ちの先生もおられるそうです。

どちらも、金光教の教えを通して神というものを伝えるのだということで、金光教の間口の広さや、他の宗教も認める姿勢が、よく現れてることだと思いました。

さて、そこで最後に、そのいろんな道筋の一つである金光教が教えてる神と人との関係を、

メモを読み上げる形で紹介させていただきましょう。

1、この神様は天地源の神様であり、形もなく姿も見えないが、この宇宙に満ち渡っておられる。そして人は、その神様のタマシイ、みたまを分け与えてもらって、この世に生まれてきている。肉体の親は両親だが、本体の親は神様なのだ。だから現実の親と共に、本体の親にも喜んでもらえるような、そんな生き方をしていくのが根本である。

2、人間のことだから、無礼や間違いを犯すことはあるだろう。しかし、それを叱りはなさっても、罰など当てられる神様ではない。本体の親として、自分の子どもである人間がかわいいという思いの他は何もなく、恵みや助かりを授けるのに忙しくて、罰など当てる暇はないと仰る神様なのだ。

3、もちろん、生活の中で起きてくる問題や、実現させたい願いなどは、それこそ子どもが親に頼むように、遠慮せずに願えばいい。子どもが何か悩みを抱えてながら、親にも打ち明けず一人で心配してたら、それを見た親はもっと心配するだろう。打ち明けて、「こうしてください。ああなりたいのです」と願ってくれたほうが、親はどれだけうれしくて安心することか。それと同じことで、何でも願ってきてくれたら、神もうれしい。人間からいろいろ願われるのが、神の役目でもあるのだから…。

とまあ、こんなふうに、穏やかで優しい神様でして。その神様と人間との間に立って、あち

らの思いや願いをこちらに伝え、こちらの悩みや願いも向こうに伝えてくださって、解決や成就を祈ってくださるという、そんな役目を果たしておられるのが、金光教の教会であり先生なのだと、こういうことです。

そして金光教では、折々のトラブルや災難を乗り越え、それぞれの願いを実現させてもらうために、その勉強や稽古は教会でして、実行実践は、毎日の仕事の場や家庭で行いなさいと、そう教えておられます。だから私も、そのお稽古のまね事くらいはさせていただいてるわけですね。

はい。以上、「かんべむさしの金光教案内」でした。機会がございましたら、またいつかお話を。

どうも、ありがとうございました。

金光教本部　ラジオ放送係

住 所　〒719-0111
岡山県浅口市金光町大谷３２０

電 話　０８６５-４２-６４５３

FAX　０８６５-４２-２１１４

メール　w-master@konkokyo.or.jp

KONKOKYO

ニッポン放送　日曜日　あさ4時50分

東海ラジオ放送　金曜日　あさ5時25分

朝　日　放　送　日曜日　あさ5時40分

RKB毎日放送　日曜日　あさ6時50分

こころで聴くおはなし　検索